

り労働力を低減したい条件において、ケース栽培の有利性があるであろう。

カーネーション栽培技術確立に関する試験

— 夏切り栽培の問題点 —

川村 邦夫・児玉 きえ子

(宮城県園芸試験場)

1 ま え が き

宮城県のカーネーションは、昭和49年度の作付面積が加温室 51,200 m²、無加温室 4,100 m²、計 55,300 m²、生産額は加温室 1億3,000万円、無加温室 2,000万円、計 1億5,000万円にのぼり、キクについて重要な切花品目である。

品種は最近までコーラルが大部分で、作型は、年末と母の日の出荷を目標に、生育にとって悪条件の夏を幼苗で過ごす6月定植、10月～5月採花の型をとってきた。しかし、シム系大輪種の導入にともない、ウイルス・フリー苗を使った頂芽挿し苗の普及により、苗の確保の点から、4・5月定植あるいは周年定植を実施する農家がふえつつある。宮城県の夏は比較的冷涼ではあるが、技術的には高温による諸問題の発生が考えられるとともに、無加温簡易ハウスでの夏切り栽培の導入の可能性も考慮して、大輪系品種の高温期の栽培の問題点について検討を加えた。

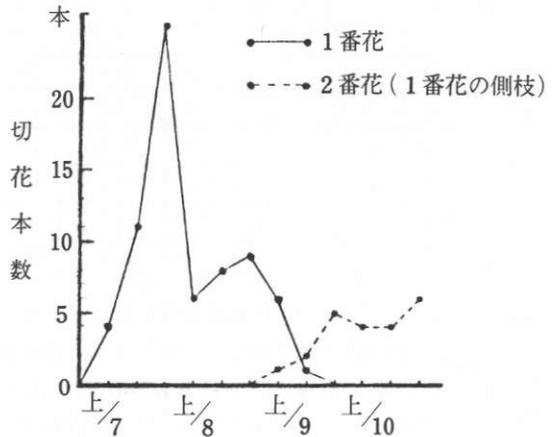
2 試 験 方 法

昭和48年度には大輪系10品種を供試し、4月下旬定植、摘心1回、4本仕立として夏切り栽培適品種を検索した。昭和49年度には、ショッキング・ピンク・シム、セブリア、シブヤL.P.を供試し、4月22日定植、摘心1回、4本仕立とし、また、ポートレート、イブニング・レッドは、4月22日、5月23日、6月22日と定植期を1カ月ずつずらし、1回半摘心、6本仕立として収量、切花品質について検討を加えた。さらに、夏期高温期の発色不良の問題を解決するため、花卉のアントシヤン含量に対する夜温の影響について、特に発色の悪いショッキング・ピンク・シムを用いて検討を加えた。試験区は夜温を自然温、20℃、15℃の3区とした。処理方法は、4月22日5号鉢に1本植えとしてハウス内で育苗し、蕾長1.5cmに達した6月25日から温度処理を開始した。日中は室内の窓際

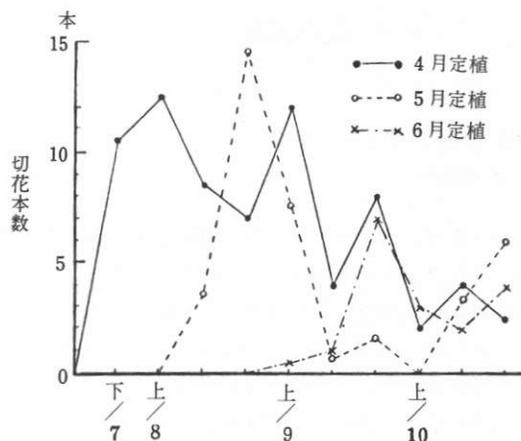
に置き、午後4時30分から午前8時30分までは所定の温度の定温器に入れ、10,000ルクスの照明をタイマーで作動して自然日長に近い14時間日長とした。分析は、完全開花時に採花し、外側から2層目の花卉5枚を選び、直径1cmにパンチして0.02%塩酸酸性メタノール4℃で5日間抽出し、20CCに希釈して510 mμで吸光度を測定した。

3 結果および考察

昭和48年度の結果、11月上旬までに1株当り7～8本採花でき、赤ではセブリア、桃色ではシブヤL.P.発色不良ではあるが濃桃色のショッキング・ピンク・シムが有望と思われた。昭和49年度の摘心1回での結果は第1図のとおりである。ショッキング・ピンク・シム、セブリアは7月上旬、シブヤL.P.は7月中旬開花を開始し、盛期は3品種ともに7月中旬～8月中旬で、9月には2番花が開花をはじめた。1回半摘心で



第1図 品種ショッキング・ピンク・シムにおける旬別切花本数の推移

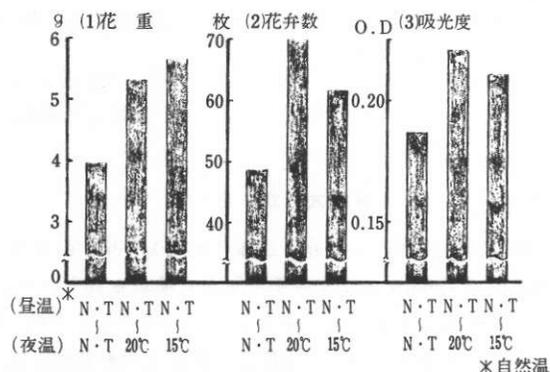


第2図 品種ポートレートにおける旬別切花本数の推移

の結果は、第2図のとおりである。4月定植では両品種ともに7月下旬開花をはじめ、盛期はポートレートは7月下旬～9月上旬、イブニング・レッドは8月上旬～下旬であった。5月定植ではポートレートは8月中旬、イブニング・レッドは8月下旬開花をはじめ、盛期は両品種ともに8月下旬～9月上旬であった。6月定植ではポートレートは9月上旬、イブニング・レッドは9月中旬開花をはじめた。

切花の品質についてみると、切花長は植付時期、品種にかかわらず8～9月にやや短くなる傾向が認められたが、8～9月でも65cm以上あり十分であると考えられた。ポートレートでは、4月定植の開花始めの7月下旬で、切花長74.9cm、花首0.6cm、茎の太さ切口径5.2mm、花首径2.7mm、花径6.7cm、花卉数71.5枚であった。5月定植では開花始めの8月下旬で、切花長69.9cm、花首0.9cm、茎の太さ切口径5.1mm、花首径2.9mm、花径6.8cm、花卉数68.2枚であった。6月定植では開花始めの9月上旬で、切花長80.4cm、花首0.9cm、茎の太さ切口径5.1mm、花首径2.9mm、花径7.3cm、花卉数69.0枚であった。イブニング・レッドもほぼ同様で、この結果7月下旬～9月上旬の切花品質は変わりはなく、やや茎細く軟弱さみではあるが、十分商品価値はあると考えられた。しかし、薄い桃色から赤にいたるまで、高温期は発色が不良になる傾向が見られた。

花卉のアントシアン含量に対する夜温の影響を検討



第3図 花重・花卉数と吸光度

した結果は第3図のとおりである。開花期は、室内に放置した25℃前後の自然温区は7月23日、20℃区は29日、15℃区は31日から開花をはじめ、夜温が低いほど開花はおくれた。しかし、花重、総花卉重は夜温が低いほどあきらかに重く、自然温区と20℃区では大きな差が見られた。花卉数は20℃区が最も多く69.8枚、ついで15℃区61.5枚、自然温区48.3枚で、前記と同様他の2区に比べ自然温区は特に少なく、花卉の大きさについても同様の傾向が認められた。花卉のアントシアン含量は20℃区が最も高く、15℃区がこれにつぎ、自然温区は明らかに低かった。この結果、この試験の範囲では、昼温30℃前後、夜温20℃で最も発色が良好であった。

4 む す び

1 ショッキング・ピンク・シムの4月定植、摘心1回4本仕立てでは収穫初めは7月上旬で、11月上旬までに7～8本採花できた。

2 ポートレートの1回半摘心6本仕立てでは、収穫初めは4月定植で7月下旬、5月定植で8月中旬、6月定植で9月上旬であった。

3 7～8月の高温期には、供試品種いずれも発色不良であった。

4 ショッキング・ピンク・シムを供試し、花卉のアントシアン含量に対する夜温の影響を検討した結果、昼温30℃前後では、夜温20℃で最も発色が良かった。